

第9回 キャリアセミナーレポート

作成者 堀 玲実

【講演内容】

今回は、株式会社ヤクルト本社の海外事業所の1つである、オーストラリアヤクルト様の **Dandenong**にある本部拠点兼工場にて開催された。工場にてヤクルト製品がどのような工程を経て作られるのかをPR部門のガイドの方から説明していただきながら見学を行った。その後、山本様（スピーカー）、大野社長、他社員の皆様から会社の説明等をしていただいた。主な内容は、以下の2点である。

1. Yakult Australia Dandenong工場の見学

オーストラリアでヤクルトがどのような手法で製造されているのかを実際に見学し、学んだ。

2. 山本様による会社説明

ヤクルト本社、オーストラリアヤクルトの会社概要と沿革、およびオーストラリアでの事業展開に加えて、山本様のこれまでのキャリアにおける経験をお話しいただいた。

【要約・感想】

Dandenongにあるこの工場はオーストラリア全土・ニュージーランドで販売されるヤクルト製品の唯一の生産拠点である。約40万本ものヤクルトがこの工場ですべて生産され、消費者のもとに届けられている。工場の生産過程を窓越しに見ることができ、それぞれの生産過程の詳細をガイドの方から伺うことができた。

最初に案内された工程では、ボトルを生産する工程を見学した。プラスチックのボトルが形成されたあと、清潔さを保つため、人の手を介することなく風によってパイプの中をボトルが移動し、次の工程へ運ばれる仕組みになっていた。次に、ボトルにラベルをつける工程を見学した。この工程で、ボトルにお馴染みのヤクルトのロゴが印刷され、順次ボトルにヤクルト本体が注入され、蓋が付けられた。

1つ上の階へ上がると、実際にヤクルトの中身を作っている現場を見ることができた。多数のタンクがあり、それぞれ材料を混ぜるところ、シロップを作るところ等、機能が分かっていた。ヤクルトの製造に必要なほとんどの材料はオーストラリア国内から調達されている一方、菌株は日本から取り寄せて現地で培養しているということだった。これは乳酸菌シロタ株と呼ばれ、ヤクルトの創設者である代田 稔博士のお名前にちなんで命名された。この

たくさんの生きた乳酸菌が私たちの腸に生きたまま届くことで、免疫力を高める一助となるのだ。最後に、ヤクルト製品の質をチェックする、品質管理室を見学した。1本のヤクルトの中には、賞味期限の最後まで、生きた乳酸菌 シロタ株が65億個入っており、その数や品質を1日を通して何度も確認している。

ここで生産される約40万本うちの約90%がオーストラリア全土で、約10%がニュージーランドに輸出されて店頭に並ぶ。1日約40万本と聞くととても多いように思われるが、これでも日本に比べれば少なく、日本では1日あたり約900万本も消費されているそう。

ガイドの方からは非常にわかりやすく、クイズを交えた説明をしていただき、非常に理解が深まったと同時に、生産の過程において凝らされている様々な工夫に感心させられた。やはり実際に工場に足を踏み入れて製造工程を見ることで体系的に製品について知ることができ、筆者も含め、参加者の皆が始終、興味津々であった。

工場見学の後は、ヤクルトの試飲をさせていただきながらヤクルトの紹介動画を視聴した。その後、山本様からヤクルト本社、オーストラリアヤクルトの事業内容、当地への進出当時の苦勞および沿革をご説明いただき、その後山本様の6年にわたるインドヤクルト・ダノンでの駐在のご経験のお話も伺った。

ヤクルトは1920-1930年代のまだまだ発展途上であった日本で腸チフスやコレラなどの当時の流行り病に罹患してから治療するのではなく、感染前に予防するという、代田博士の「予防医学」にける強い思いから生まれた。「私たちは、生命科学の追究を基盤として、世界の人々の健康で楽しい生活づくりに貢献します。」という企業理念のもと、世界中の人々の健康を支えてきた。乳酸菌 シロタ株というバクテリアが食品として摂取され、生きたまま人々の腸に届くことによって腸内環境を整え、免疫を高めるのに役立つのである。創業は1935年であるが、今あるヤクルト本社は1955年に設立された。すでに海外に手広く進出しており、世界での1日あたりの売り上げが、2019年に4,000万本を超えた。また日本国内ではより乳酸菌の数を増やしたYakult1000のテスト販売が同年に開始、2021年に全国販売された。

オーストラリアに進出したのは1994年という早い段階であった。その当時からDandenongに工場を構え、ビクトリア州から始まり、ニューサウスウェールズ州、クイーンズランド州と徐々に販売地域を広げ、オーストラリア全域に広がった後にはニュージーランドにも進出した。ビクトリア州に進出した背景としては、州政府から積極的な海外事業への誘致が行わ

れていたことと、原材料を調達する利便性が備わっていたことと、物流の拠点としての利便性があったことが挙げられる。年々売り上げは概ね右肩上がりであり、現在はDandenongの工場での生産が需要に追いつくのが困難になりつつある状況である。オーストラリア進出当初は「バクテリア」という言葉のイメージの改変が大変だったとのことだ。バクテリアは悪いものというイメージが当地にあったため、人々にとって有益なバクテリアも存在するのだという認識をゼロから築き上げる必要があったという。また、「発酵食品が美味しくない」というイメージの払拭も必要で、実際に口にしてもらって美味しいというイメージを少しずつ広げていった。その成果もあって、現在はオーストラリアにおけるブランド認知度は92%となっており、マーケティングの卓越さが伺える結果となっている。オーストラリアとニュージーランドにおいてなくてはならない存在になることを目指して、日々奔走されている。

現地の人々の目線に立ってパッケージに現地の材料を取り入れているということを明示するなどの配慮をしながらも、自社らしさを保っているマーケティングの概要を知り、その手法は非常に卓抜したものだと感じた。毎日飲んでも飽きない量に設定しているという点にも納得した。何気なく日々飲んでいるヤクルトにこんなにも細かい思慮が張り巡らされているということがわかり、とても大きな学びになった。

最後の説明では山本様個人の今までのキャリアのお話を伺った。インドに6年もの長い間駐在をされ、ヤクルト製品をインドで普及させるために取り組まれたエピソードをユーモアを交えてお話しくださった。体感されたインドの文化や、その経験から得た学びを教示いただき、学生たちの今後の学びに大いに役立った。筆者個人としても、インドという日本とは非常に異なる文化・環境を持つ場所で活躍されたという経験を拝聴するのは初めてで、今後海外で仕事をするビジョンを描くにあたって参考になった。

最後には山本様をはじめ、大野社長、社員の皆様に学生からの質問に丁寧にお答えいただいた。写真撮影の後、外では非常に強い雨が降っており、社員の方々から傘をお借りして移動し、皆様にお見送りいただいた。

今回のイベントへの参加承諾、準備して下さった山本様および今回協力して下さった社員の皆様に厚く御礼申し上げます。ヤクルト様の乳酸菌飲料業界におけるリーディングカンパニーとしての成長の歴史と、企業のグローバルな理念に基づいた人々の健康を支える事業に触れられる非常に貴重な機会でした。

今回のイベントはメルボルン日本商工会議所のサポートにより実施をすることができました。我々のイベント運営にご協力いただきありがとうございます。今後もより良いイベントを企画し、学生と企業の架け橋となるよう尽力してまいります。

グローバルキャリアパスメルボルン
堀